



Title	トゥラン主義運動以前のトゥラン言説：フリードリヒ・マックス・ミュラー説と明治日本
Author(s)	中井, 健太
Citation	EX ORIENTE. 2024, 28, p. 137-161
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/95006">https://doi.org/10.18910/95006</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◎論文

# トゥラン主義運動以前のトゥラン言説

—フリードリヒ・マックス・ミュラー説と明治日本—

中井健太

## 1. はじめに

トゥラン<sup>1</sup>主義は、20世紀前半の日本、ハンガリー、トルコで、それぞれ異なる形で現れ、流行した民族言説あるいは政治運動であり、「トゥラン民族」や「トゥラン種族」の連帯を唱えるものである。そのトゥランとは、おおよそ、「ウラル・アルタイ語族」と同義とされることが多い。しかし、そもそもトゥランという語は、言語学的な語族なのか、人種なのか、民族なのか、曖昧な状態で使われ続けてきたため、客観的定義は困難である。ユーラシア主義研究者の浜由樹子は、トゥラン主義を分析した論考の中で、「今日の言語学ではウラル語族とアルタイ語族は分けられているが、トゥラン主義が流行した当時においては、「ウラル・アルタイ語族」という一つのカテゴリーとして扱われていた」と述べている [浜 2011: 1]<sup>2</sup>。しかしこの記述はやや違和感を覚える。19世後半にはすでに、ヨーロッパの言語学界ではウラル諸語とアルタイ諸語の親族関係 (affinity) については疑義を呈する学者が少なからず存在したからである [Rachewiltz & Rybatzki 2010: 1-4]<sup>3</sup>。このことは本稿で引用する諸史料からもわかることである。また、ハンガリーにおいて、ハンガリー語がテュルク諸語起源かフィン・ウゴル諸語起源かをめぐって議論がたたかわされた「トルコ・ウゴル戦争」<sup>4</sup>では、後者が学術的に勝利し、ハンガリー語のア

ジア起源説が科学的に否定されたにも関わらず、トゥラン主義はハンガリーの政治の場で存在感を一層強く持ち続けた [Ablonczy 2022]。こうしたことを考慮すると、トゥラン主義を考察する際には「ウラル・アルタイ」や「語族」という語は慎重に使用する必要があるだろう。

日本でのトゥラン主義運動は1920年代に始まったとされている [浜 2011: 11, 家田 1982: 207, 1995, 2015, 田中 2021: 208-209]。すなわち、ハンガリーのツラン協会のバラートシが来日し、彼と親交のあったハンガリー語学者の今岡十一郎が1922年に東京にツラン民族同盟を結成した時点を日本におけるトゥラン主義運動の開始とするのが通例だ。事実、運動としてのトゥラン主義が始まるのは1920年代であり、それはバラートシと今岡の交流によるところが大であったことは間違いではないだろう。

しかし、トゥラン概念そのものも、この時に輸入されたものであると考えてはならない。本稿で述べるように、政治的なトゥラン主義運動が始まる以前から、日本にはトゥランの語は伝わっており、複数の論者が、それぞれ異なる文脈、意味合いで使っていた。トゥラン主義運動を扱った数少ない先行研究においても、この点はほとんど論じられておらず、家田がわずかに言及しているにすぎない<sup>5</sup>。しかし、大きな流行言説・政治運動としてのトゥラン主義が現れる前段階として、明治や大正初期の日本でトゥランの語がどのように使われていたのかを検証することは意義があるはずだ。また、こうしたことを理解することは、「日本的」トゥラン主義の特徴、つまりハンガリー、トルコのトゥラン主義と何がどう異なるのかをより深く考えるための前提にもなりうる。

なお、本稿で取り上げるいくつかの事例は時系列順に並べているが、この配列順はあくまで便宜的なものにすぎない。本稿では、誰が、どのような意味づけで使ったのかということに考察の重きを置いている。

## 2. フリードリヒ・マックス・ミュラーによるトゥラン定義

言語あるいは人種の分類の用語としてトゥランという語を、ある程度明確

な定義を以て使い始めたのは、宗教学者のフリードリヒ・マックス・ミュラー (Friedrich Max Müller, 1823 ~ 1900)<sup>6</sup>であることは定説となっている<sup>7</sup>。彼は、世界の言語を3つのグループ (family) に分類した。すなわち、アーリア (Aryan)、セム (Semitic)、トゥラン (Turanian) である。彼のこの考えは、1850年代に彼の著作の中に現れ始め [Driem2004: 229-232]、後の *Lectures on the Science of Language* (1861年) で明確に示されることになる。注意したいのは、この時点ではトゥランは言語学で言うウラル・アルタイ諸語としては使われていないことである。以下に該当部分を引用しよう<sup>8</sup>。

The whole of what is called the *Turanian* class consists of terminational or agglutinative languages, and this Turanian class comprises in reality all languages spoken in Asia and Europe, and not included under the Aryan and Semitic families, with the exception, though this is doubtful, of Chinese and its cognate dialects. In the great continent of the Old World the Semitic and Aryan languages occupy only what may be called the four western peninsulas, namely, India with Persia, Arabia, Asia Minor, and Europe; and we have reason to suppose that even these countries were held by Turanian tribes previous to the arrival of the Aryan and Semitic nations. [Müller1866: 323]

アーリアとセムが比較言語学で言うところの同系の「語族」あるのに比して、トゥランは語種 (Turanian class)<sup>9</sup> という扱いである。そして、トゥラン語種は、アジアとヨーロッパにおいて、アーリア語族、セム語族、中国語とその諸方言を除く全ての言語からなっているという。「旧世界」においてはアーリア語族とセム語族は4つの半島 (インド・ペルシア、アラビア、小アジア、ヨーロッパ) に分布しているに過ぎず、それらの地でさえ、アーリアとセムが来る以前はトゥランが分布していたと述べている。

The Turanian family or class consists of two great divisions, the *Northern* and

the *Southern*. The Northern is sometimes called the *Ural-Altai* or *Ugro-Tataric*, and it is divided into five classes, the *Tungusic*, *Mongolic*, *Turkic*, *Finnic*, and *Samoyedic*. The Southern, which occupies the South of Asia, is divided into four classes, the *Tamulic*, or the languages of the Dekhan ; the *Bhotiya*, or the dialects of Tibet and Bhotan ; the *Taic*, or the dialects of Siam ; and the *Malaic*, or the Malay and Polynesian dialects. [Müller1866: 324]

「トゥラン語族または語種」は、南北2つの大分類にわけることができ、北は「ウラル・アルタイ諸語」または「ウゴル・タタール諸語」とも呼ばれ、ツングース、モンゴル、テュルク、フィン、サモエドの5諸語<sup>10</sup>に分けられるという。そして南はアジア南部を占めており、タムル、ボット、タイ、マレーの4つの諸語に分けられるという。ここで注目しなければならないことは、ミュラーのいうトゥランはアジア南方のチベット・ビルマ系言語をも含むものであって、いわゆるウラル・アルタイ諸語は2大分類のうちの北分類に相当するものとして書かれていることである。

浜が言うように、20世紀のトゥラン主義運動期においては「トゥラン民族」が「概して「ウラル・アルタイ語族」と同義とされ」てきたことは間違いないだろうが〔浜 2011: 1〕、その一方で、トゥランがウラル・アルタイ語族の同義語として生み出され、その後もウラル・アルタイ語族を指す語として使われてきたわけではないことに注意したい。トゥラン民族概念の学術用語としての世界への普及に大きな役割を果たしたミュラーは、言語分類としてのトゥランはアジア南方のチベット・ビルマ系言語をも含む広いものとして定義し、ウラル・アルタイ諸語はトゥランの2大分類のうちのひとつであるに過ぎなかった。

なお、上の引用からも明らかなように、ミュラーは言語グループを人種や民族、文化の単位と混同して論じている。この姿勢は多くの学者から批判を受けるのだが、ミュラー自身はあくまで言語分類の概念として論じていたつものようである〔長田 2002: 117-8〕。

ミュラーの「トゥラン」概念の提唱は、言語学界や民族学界に議論を巻き起こしつつ急速に普及したようである。というのも、インド・ヨーロッパ語族、セム語族と並んで、トゥラン語族というカテゴリーが19世紀の後半に広く使われたことが当時の史料からわかるからだ。例えば、1874年9月にロンドンで開かれた第2回国際東洋学会議（International Congress of Orientalists）は-Semitic、Turanian、Aryan、Hamitic、Archaeological、Ethnologicalの各セクションに分かれて行われており<sup>11</sup>、セムやアーリアと並ぶ言語分類としてのトゥランが知識人の間には国際的にかなり普及していたことがわかる。なお、トゥランのセクションで行われた報告は、5つ中3つが中国語や中国の書籍に関するものであったことを考えると、やはり「トゥラン＝ウラル・アルタイ」という認識はまだあまりなかったと言えるだろう。むしろ、「アーリア、ハム、セム以外のアジアを中心とした言語群」という認識に近かったと思われる。

### 3. 明治日本の文献に見られるトゥラン

日本のトゥラン主義運動とムスリム政策の関係についての、日本初の本格的な研究を行ったシナン・レヴェントは、トゥラン民族概念を初めて日本で紹介したのは白鳥庫吉の1901年の論文「戎狄」（『東洋哲学』所収）であるとする[レヴェント2019: 24-25]。しかし、これは2重の意味で誤りだ。まず、「トゥラン民族という名称を使用」していないのであれば、トゥラン民族概念を紹介したことにはならない。レヴェントは、白鳥が「戎狄」という語を使ってトゥラン民族を指したと述べるが、その「戎狄」がトゥランであるという根拠も、白鳥がトゥラン民族概念を使っていたという根拠も提示していない。二つめに、白鳥がこの論文でトゥラン民族を紹介しようとしたと仮定しても、トゥラン概念を日本語で書いた日本語文献は白鳥の「戎狄」以前に存在する。このことは以下で明らかになる。

## (1) 文部省『百科全書』の『言語篇』（1883）

この『言語篇』は、文部省の『百科全書』プロジェクトのひとつである。『百科全書』は *Chambers's Information for the People*<sup>12</sup> のシリーズを日本語訳し、出版するという文部省肝いりの一大事業であった。『言語篇』は、この *Information* のうちの“LANGUAGE”を大槻文彦が翻訳したものである〔長沼 2017: 141-160〕。長沼によると、この『言語篇』が出版されたのは明治 16 年（1883 年）のようだ〔長沼 2017: 144〕。

さて、『言語篇』においてトゥランはどのように使われているのだろうか。「言語の模造を論ず」<sup>タイプ</sup><sup>13</sup> という節において、まず、言語は 3 種類に分けられることを言う。その一つめとして「支那語ノ如キハ其發達ノ初級ニ於テ其發生ノカヲ抑止セラレタル者ニシテ之ヲ名ヅケテ單綴語又ハ孤立語ト謂フ」〔大槻 1883: 91〕<sup>14</sup> とする。そして、

言語發生ノ階級ニ於テ更ニ之ヨリ高キ者ハ即チ 粘 着 語 是レナリ。  
此種ノ言語ハ支那語等ニ比スレバ遙ニ多クシテチュラーニアン及ビ亞米利  
加群語ハ皆之ニ屬ス。此種ノ言語ニ於テハ別種ノ語根ヲ意味アル語根ノ尾  
ニ接續シ即チ粘着セシメテ以テ思想ノ關係ノ部分ヲ著シタ聲音ニ表示スル  
者ナリ〔大槻 1883: 91〕<sup>15</sup>

とある。その後、言語進化の最高形態としての變尾語である「アリアン及ビセミテック」が述べられ、「變尾語即チ混鎔語ノ最モ善ク整頓セル者ト雖モ元來支那語ノ如キ初段ノ言語ヨリ發生シテ粘着語ノ段級ヲモ經過シタルコトハ語學者ノ信ズル所ナリ」〔大槻 1883: 94〕<sup>16</sup> と続く。孤立語 (isolative language)、膠着語 (agglutinative language)、屈折語 (inflective language) の言語類型論が進化の軸で論じられるという、アウグスト・シュライヒャー以来の西欧での言語観<sup>17</sup> が如実に反映されている。

本稿の論点はトゥラン言説であり、今回はこの言語学史・言語哲学史の議論には深入りしない。ここではトゥランは、膠着語の言語群の一つとして位置づ

けられており、つまり中国語のような孤立語から、屈折語のアーリア諸語、セム諸語に至るまでの中間形態とされていることが読み取れる。

また、同じ「言語の模造を論ず」の節で、語族としてのトゥランについても紹介されている。

亞細亞及ビ歐羅巴（オセアニア洲ト共ニ）ニ行ワレタル各種ノ國語ニ中に  
 アリアン科及ビセミテック科ニ屬セザル者ハ其支那語及びビ同類ノ語ヲ除  
 ク外ハ悉皆之ニ下スニテウラニアン<sup>ファミリー</sup>科<sup>[ママ]</sup>ノ名称ヲ以テスル者多シ。然レ  
 ドモ語學者中ノ謹慎ナル者ハ此名称ヲ非トシ唯アリアン及ビセミテックノ  
 二群語ニ限り科ノ名ヲ下セリ。又チュラニアン科ノ支派ニ屬スルヒンニッ  
 ク語サモエディック語土耳其語蒙古語チュングシク語ノ五者ハ互ニ相親  
 屬タルノ徴候判然トシテ見ルベキ所アルガ如シト雖モ彼ノ學派ホ未ダ孤疑  
 スル所アリテ其説ヲ確言セズ。[大槻 1883: 96-97]

アーリアとセム以外の言語のうち、中国語とその同類言語を除いた全ての言語をトゥラン語族として扱う者が多い一方で、語族と言えるものはアーリアとセムの2グループだけだとする言語学者もいること、トゥランに属するフィン、サモエド、トルコ、ツングース、モンゴルの各諸語グループは互いの親族関係が証明されていないことが述べられている。つまり、ウラル・アルタイの諸語が共通の祖語を持つ語族（family）であるというのはあくまで仮説であって、語族と呼ぶことに疑義を呈する学者が少なからずいるという、当時の西洋言語学界の状況を伝えている。

(2) 高山林次郎『世界文明史』、「人種競争より見たる極東問題」、「十九世紀總論」

次に扱うのは評論家の高山林次郎（樗牛）（1871～1902）の『世界文明史』（1898）と「人種競争より見たる極東問題」（1898）、そして「十九世紀總論」（1900）である。この頃の高山は雑誌『太陽』の主筆を務めており、日清戦争の勝利とその後の三国干渉の屈辱という一連の流れの中で国粹主義、日本主義

的な傾向を強めていた [吉田 1977: 299-300]<sup>18</sup>。

博文館の帝国百科全書<sup>19</sup>の一つとして執筆された『世界文明史』には次のような記述が見られる。第2編「東洋の文明」<sup>20</sup>において、

邦を以て之を名くれば、其の主要なるものは支那、日本、印度、波斯、埃及、アッシリア、バビロニア、及びパレスチナ。人種によりて之に名くればアーリア人種、ハム人種、セム人種、及びツラン人種是れなり。是の中にて支那、日本はツラン人種に、印度、波斯はアーリア人種に、埃及はハム人種に、バビロニア、アッシリア、及びパレスチナはセム人種に屬す。  
[高山 1994a: 34-35]

とあり、東洋の諸人種の一つに「ツラン人種」を挙げ、「支那」と日本をこの人種に含めている。そして、

歴史を通観するに、世界に三個の人文の潮流あり。支那、印度、及び歐羅巴之なり。…支那人文はツラン人種のそれを代表するものにして、他の二者の對峙して古來一種の面目を維持せり。[高山 1994a: 35]

「支那」の人文<sup>21</sup>は「ツラン人種」の人文の潮流を代表するものであり、「印度」と「歐羅巴」の人文に対して古來一種の面目を維持しているという。「支那人」（ここでは漢民族を指している）をトゥラン人の中心に据えている。ミュラーがあくまで言語分類としてトゥランを論じたのに対し、高山は明らかに人種としてトゥランを論じている。また、上記の『言語篇』で述べられたトゥランとも意味が全く異なり、もはや別の単語であるとさえ言える。さらに、後年のトゥラン主義運動で論じられたトゥラン民族概念とも大きく意味を異にする。

高山のトゥラン定義がミュラーの論からやや乖離しているのは、当然であると言える。なぜなら、高山がミュラーの説を無批判に受容していたわけではな

いことが次の記述からわかるからである。「ツラン人種に関するマクス・ミュラーの説」という節で、ミュラーの説、つまり東南アジアまで含めてトゥランと称する説を紹介した上で、次の節を「是の節の価値」と題して、

マクス・ミュラーの是の説は、専ら言語学上の比較研究の結果に本き、何等古物學上、若しくは歴史上の基礎あるに非ず。故に言語と人種の必ずしも一致せざることの明なる今日、素より厚く信憑するに足らざるべし。然れども一個の憶説としては、他の有力なる反證の擧らざる限は、吾人の参考に資するを得べし。[高山 1994a: 37]

このように、ミュラーの説を相対化する態度を取っているからである。そして、言語と人種が必ずしも一致しないことを述べ、言語分類としてのトゥランとは異なる、人種分類としてのトゥランがあることを示唆している。西洋の学問を受容しつつも、主体的に咀嚼しようとする姿勢が見て取れよう。

次に、「人種競争として見たる極東問題」<sup>22</sup>をみてみよう。

ツラン人種は烏拉、アルタイの間より東南北の三方を指して更に四派に分れ、テイツングス、マレー、タムール、フィン諸民族を爲し、支那朝鮮日本の諸国を建立せり。[高山 1994b: 340]

と述べ、ミュラー流の定義をしている。そして、「アールヤ人種全盛の第一期」としてのローマ帝国が衰えはじめたとき、

茲に三世紀より九世紀に至るまで、新にツラン人種の第遷徙興りぬ。是が先鋒たりしものは、嘗て同人種の帝国支那を侵して撃退せられたるフン（匈奴）民族なり。…ツラン人種中、フン族に次ぎてアールヤ人種を苦しめたるもの、尚ほアプール民族とマジヤール民族とあり。特に後者は九世紀の末より凡そ一世紀の間、西は仏蘭西より、東はコンスタンチノ

ポリに至る歐州の中原に出没し、遂に匈牙利の一王國を建設せり。[高山 1994b: 341-342]

と述べている。つまり、世界史においてアーリア人種に対抗する人種としてのトゥラン人種論がここで展開されている。さらに、

支那は吾人と同人種に属する唯一の帝国に非ずや。ツラン人種の国家は、極東以外に於て全くアールヤ人種の勦滅せられたり。吾人の日本と支那帝国とは、世界に於ける最後のツラン人種の国家として、相抱擁し、相提擲してその運命を共にすべきことを誓ふべきに非ずや。支那は吾人の唯一の同胞なり。[高山 1994b: 349]

と述べ、「唯一の同胞に大打撃を加へ」た日清戦争を「ツラン人種の一大不幸」とする [高山 1994b: 349-350]。最後には、

天、吾人をして極東に邦せしむ。豈夫れ偶然ならむや。ツラン人種が最後の城郭は、吾人の大八洲にあり [高山 1994b: 353]。

として日本をトゥラン人種の最後の砦であると述べており、当時の高山の国粹主義的雰囲気を感じることができる。2年後の「十九世紀總論」(1900)<sup>23</sup>においては以下のように述べている。

而して其の(「極東問題」を指す一筆者注)根本的動機となれるものは、即ちアリアンとチュラニアンとの間に於ける人種競争に他ならず。[高山 1994c: 288]

土耳其は歐羅巴の亞細亞也、故に歐羅巴に於ける歐亞の衝突也。…  
極東問題は、東方問題の如く其の根本は人種競争、六百年以降繼續せら

れたるチュラニアンとアリアンとの人種競争の一節に過ぎざる也。[高山 1994c: 313]

極東問題の根本的動機は、「アリアン」と「チュラニアン」の「人種競争」であり、それは600年以上続いてきたものであるという。そしてその対立はバルカン半島での東方問題とも根本は同じであるという記述である。依然として、高山は世界の情勢をアーリアとトゥランの人種的対立として捉えていることがわかる。

以上、高山の複数の著作からトゥランに関わる記述を引用してきた。ミュラーの定義とは根本の部分では共有している部分も大きいと思われるが、論が大きく飛躍している。つまり、ミュラーがあくまでトゥランを言語のカテゴリリーとして論じたのに対し、高山はそれに文明の担い手としての人種という意味を付与し、世界史上でアーリア人との対決を運命づけられたものとして論じた。高山は彼の思想の中に、かなり独自のトゥラン概念を形成していたように思われる。

### (3) 浮田和民『西洋上古史』

高山とほぼ同時期か、その直後に歴史学者・思想家の浮田和民（1860～1946）が著した『西洋上古史』にも、トゥランが現れる。熊本洋学校の第一期生として入学した浮田はキリスト教徒となり、その後同志社で学んだ。同志社を去った後は東京専門学校での教育・研究と同時にジャーナリズムの世界でも言論・執筆活動も精力的におこなった。1909年には雑誌『太陽』の主幹に就任している [姜 2003: 14-18]。『西洋上古史』は東京専門学校（のち早稲田大学）の講義録ないし教科書として1900年前後に何度も版を重ねた概説書である [吉澤 2010: 3]<sup>24</sup>。この『西洋上古史』には、前述の高山とは全く異なる意味、文脈でトゥランの語が使われている。「世界中の言語も亦た数個の種類に編入することを得べし」と述べた上で、以下のように書いている。

- (一) アリヤン語 …
- (二) セミチク語 …
- (三) ハミチク語 …
- (四) チュレニアン語 此名称は意義漠然として或は以上三種別の外亞細亞及歐羅巴に於てセミチク語、アリアン語及び支那語の五類に屬せざるものを包含す。匈牙利のマヂャル人、フィン人、ラップ人、エッソニア人、土耳其人、韃靼人、蒙古人等の言語、皆な是なり。  
チュレニアンの名称は学者の意見により包含する所一定ならず。マツクス・ムユレルは之を南北兩部に別ち、北部は左の五種を包含するものと為せり。
  - (イ) ツングシツク (The Tnugusic)
  - (ロ) 蒙古種
  - (ハ) 土耳其種
  - (ニ) フィンニク語 フィンおよび匈牙利のマツヂャル人等の語
  - (ホ) サモエジク語 (The Samoyedic) 日耳曼海より東方露西亞及び支那の間に蔓延せり。歐羅巴及び亞細亞の極北に行はるるものなり。南部は左の4種を持って其の主要なるものとせり。
  - (イ) ドラヴィデイアン語 南部印度人(アリヤン人種以前の土人)の語
  - (ロ) ガンヂス地方の語
  - (ハ) 暹羅
  - (ニ) 馬來及びポリネシア
- (五) 支那語 …
- (六) 馬來及びポリネシア種 …
- (七) 亞米利加種 …
- (八) 阿弗利加種 … [浮田: 16-18]

として、トゥランの名称の定義は学者により異なっているという重要な点を記しつつ、ミュラーの説を紹介していることがわかる。

しかし、この『西洋上古史』は、単に西洋の学術を紹介しているだけではない。高山と同様、浮田も独自の解釈も述べている。続く以下の記述では、浮田の意思を読み取ることができる。言語は社会や文明と密接に結びついたものであることを述べた上で、

以上言語によりて区別せられたる人種中最も歴史に関係あるは第一チュレニアン、第二ハミチク、第三セミチク、第四アリヤン人種即ち是れなり。歴史は此順序によりて漸次に発達し、第一は文明を第二に傳え、第二は之を第三に傳え、第三は之を第四に傳えたり。文明の初期は困難最も大なるを以て文明史上第一の偉功は之をチュレニアン人種の歸せざる可からず。アリヤン人種の文明最も能く発達したるは凡て他の人種よりも遅く出でて他の人種より文明を吸収したるが故なり。文明の功業は一にアリヤン人種のみ在るが如く記載するは西洋史家の習癖にして歴史の事實にはあらざるなり。[浮田：21]

トゥラン語を使うトゥラン人種が文明度が最も低い段階にあり、アーリア語を使うアーリア人種が最も発達した段階にある人種であるという記述は、確かに西欧学者の世界観を受容したものとみえる。しかし最後の記述は、最も困難である文明の初期段階を担ったのはトゥラン人種であり、最も発達したアーリア人種の存在は先人達の努力があってこそなのだという浮田の意思が伝わってくる。つまりアーリア人種の世界的覇権は、彼らだけで築いたものではないという主張だ。ここではトゥランは、世界史の土台を築くという重大な仕事をやってのけた語族＝人種として論じられており、アーリアを牽制する言説とみることができる。浮田は、西洋中心史観に対する異議申し立てを行っていると言えよう。

## (4) マクス・ミュラー (南条文雄訳) 『比較宗教学』

最後に紹介するのは、『比較宗教学』(1907)である。これは、ミュラーの *Introduction of Science of Religion* (1873) を、彼の直弟子で仏教学者の南条文雄 (1849～1927) が邦訳したものであり、『帝国百科全書』の一つとして刊行された。南條は1876年からオックスフォード大学に留学し、ミュラーの下で近代仏教学を学んだ。この『比較宗教学』では、第二節で紹介したミュラー自身のトゥラン学説が訳出されている。なお、南條の日本語訳分は比喩も多く難解であるため、以下の引用では南條の日本語訳に加えて英語の原文も記載する。第3章で宗教と言語の関係、および宗教学と言語学の共有するところが大なることを述べる文脈の中で、以下のように述べている。

亞細亞大陸と歐洲の主要たる半島とを限り研究する時は、その推送せらるる人類言語の廣大なる沙漠中に於て、三個のオーシスの形成せられたるを察知すべし。…此等三個國語のオーシスは、チューレーニアン、セミティック及びアリヤン即ち是れ。…

支那語はチューレーニアン語の中にて最古の代表者たること、最早疑ふべき餘地なきを以て、予は茲に支那語につき研究を試むべし。[マクス・ミュラー 1907: 138-139]

If we confine ourselves to the Asiatic continent with its important peninsula of Europe, we find that in the vast desert of drifting human speech three, and only three, oases have been formed … These three oases of language are known by the name of Turanian, Semitic, and Aryan. … Taking Chinese for what it can hardly any longer be doubted that it is, viz. the earliest representative of Turanian speech … [Müller1873: 154-155]

世界の3つの言語グループ、すなわちアーリア、セム、トゥランを挙げ、中国語もトゥランに含まれるとしている。また、次のようにも述べている。

国語を研究する人々が、何故に言語の部屬を分ちて三個以上となすことを得ざりしやを疑ふものあり、否な寧ろ国語研究者が單に之を二個の部屬に分類するに止まるやを疑ふものあり。爾かく国語を二分類する所以は、支那語がチューレーニアン語の二個の分派たる北部及び南部チューレーニアンを中心をなす所以の理にして、十分説明せられざる限り、尚ほ未だ嚴格なる種族の意味に於てチューレーニアン族が一種族をなすを得ざればなり。搗てて加へて支那語は實際上未だ以て確定せられざりし言語を最も夙く確定したりけるをや。斯かる未定の言語は、後代に及び漸次確定せられ、漸次傳説的となりぬ、即ち北部に於てはトゥングシツク、モンゴリツク、タータリツク、及びフキンニツク語となり、南部に於てはタイツク、マレイツク、ポーティヤ及びタムリツクとなりたりとの事實を證明せられざる以上、チューレーニアン族は猶ほ嚴格なる家族の意味によりて、未だ一家族たらざるべければなり。[マクス・ミューレル 1907: 144]<sup>25</sup>

People wonder why the students of language have not succeeded in establishing more than three families of speech — or rather two, for the Turanian can hardly be called a family, in the strict sense of that word, until it has been fully proved that Chinese forms the centre of the two Turanian branches, the North Turanian on one side, and the South Turanian on the other; that Chinese forms, in fact, the earliest settlement of that unsettled mass of speech, which, at a later stage, became more fixed and traditional, — in the north, in *Tungusic*, *Mongolic*, *Tataric*, and *Finnic*, and in the south, in *Taic*, *Malaic*, *Bhotiya*, and *Tamulic*. [Müller 1873: 160-161]

アールアとセムについては言語学的に親族関係が証明される語族であるが、トゥランについては語族ではないと考えるのが主流であることを述べている。そしてその理由は、中国語が南北の2つのトゥランの分派の中心であることが言語学的に証明されていないからであるという。この『比較宗教学』では、ミュラーの説がおおよそ正確に訳されて紹介されていることがわかるが、複雑

な論理構造で述べられ、また、言語学の研究手法を応用して宗教を論じるというコンセプトの書であることも相まって難解なものとなっている。

#### 4. おわりに

本稿では、トゥラン主義運動以前の日本におけるトゥラン言説について、いくつかの事例を取り上げ、その論者や論の特徴を考察してきた。トゥランという語が、唯一普遍的客観的定義を持つ概念ではなく、論じる人や場所、時代により内容や範囲がかなり流動的であることには注意しなければならない。

先行研究や辞書では、「トゥラン」という語は「ウラル・アルタイ語」の同義語として説明されることがほとんどである。実際、20世紀前半のトゥラニズム運動は、少なくとも建前は「ウラル・アルタイ語族」の言語話者の民族的連帯を唱えたものであったことは間違いない<sup>26</sup>。しかし第2節で見たように、「トゥラン民族」概念のそもそもの発明者であるフリードリヒ・マックス・ミュラーはトゥランをアジア南方のビルマ・チベット系言語をも含めた言語グループとして定義し、ウラル・アルタイ諸語はその北半分に相当するものであった。つまり、ミュラーが言うトゥランは「ウラル・アルタイ語族」ではなかった。加えて、ミュラーは言語分類としてトゥランを創造したのであって、人種・民族分類としてこの語あるいは概念を創始したのではなかったことにも注意したい。

そのトゥラン概念は1920年代に日本でトゥラニズム運動が始まる以前、つまり明治期には既にいくつかの日本語文献に表れていた。確かに、トゥラン主義が「脚光を浴びるのは」「1920年代から1930年代、つまり戦間期のことであった」[浜 2011: 17]。しかし、トゥランの語はそれ以前から日本に伝わっており、複数の立場の人が、それぞれ異なる意味や文脈で使っていた。翻訳文献に現れるトゥランの語も、『言語篇』のように、言語学に限った用語として記述される場合もあれば、『比較宗教学』のように、人種、民族、宗教の意味も含む概念として紹介される場合もあった。

一方、日本人自身による文献では、彼ら独自の解釈や意味づけを行っている。高山林次郎は、ミュラーのトゥラン定義をある程度参考にしながらもそれを相対化し、アーリア人種に対抗すべき世界の文明の担い手のひとつとしてのトゥラン人種論を展開している。浮田和民も、トゥラン人種が世界文明の基礎を築くという困難を成し遂げたからこそ現在アーリア人種が繁栄しているのだと主張し、西洋中心史観を批判している。両者とも、西洋学問を受容しつつも、部分的な再解釈や反発が見られる。

本稿では、これらの日本語文献が誰によってどう読まれたのかを考察することはできなかった。例えば、雑誌『太陽』の読者は多かったはずであり、高山の文章を読み、影響を受けた人は多かったのではないだろうか。一方で、南條訳の『比較宗教学』は用語と論理構造が難解な部分も多く、読者は少なかったのではないかといった想像はできる。

高山や浮田がどのような媒体でトゥランの語を知ったのかという点についても、本稿では論じることができていない<sup>27</sup>。明治初期の日本の言語学の形成過程において、西洋流の近代言語学を伝えたのは、お雇い外国人として1886年に帝国大学に招聘されたバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）である。チェンバレンは、アメリカの言語学者ホイットニー（William Dwight Whitney）の1875年の著作を教科書として使用していたという [長田 2020: 317, 長田 2021: 44-45]。このホイットニーは、1892年の著書でミュラーの通俗的な言語学を批判している [Whitney1892]。そう考えると、ミュラーが創始したトゥラン語族（あるいはトゥラン民族・人種）は、ホイットニーを読んでいたチェンバレン経由で伝わった可能性もある。いずれにせよ、大正期に始まるトゥラン主義運動の前段階の時期であったことを考えると、誰がどう読んだのか、どのような伝播過程があったのかを検証することは歴史学的に意義のあることである。

既に1880年代の『言語篇』で、西洋学術界では「トゥラン」を学術的な語族として認めない学者もいるという最新事情が伝えられていたにも関わらず、その後の日本は言語学界も含めて「日本語＝ウラル・アルタイ語族説」が支配

的となり、トゥラン主義も流行した。こうした学説や言説が、日本の大陸進出政策と密接に関わるもので、大陸支配を正当化するものとして論じられたことは言うまでもない。

[注]

- 1 日本語文献には「ツラン」「チューレニアン」「トゥラン」等、表記が様々なものが現れるが、本稿では「トゥラン」に統一する。引用の場合はこの限りではない。
- 2 シナン・レヴェントも「現在の言語学において同言語族はウラル語族とアルタイ語族と区別されているが、19世紀から20世紀半ばにかけての当時においてはウラル・アルタイというひとつの語族として扱われていた。」と、浜とほぼ同じ記述をしている [レヴェント2019: 註9]。
- 3 ウラル諸語とアルタイ諸語との言語学的親族関係は、今日においては否定的にみる言語学者が大多数である。また、アルタイ諸語内での、モンゴル、ツングース、テュルクの3つ諸語間での親族関係をめぐっても議論があり、こちらについても今日まで親族関係は証明されていない [Poppe1965: 154-155, Rachewiltz & Rybatzki 2010: 348-355, Викторова1980: 70-92 等]。なお、ウラル諸語の親族関係は19世紀末に既に明らかにされており、ウラル諸語はウラル語族と言い換えても良い [服部1989: 177-180]。
- 4 ハンガリーの東洋学者ヴァームベリイ (Ármin Vámbéry) は1882年に *A magyarok eredet* (『ハンガリーの起源』) を出版した。これが契機となって、ハンガリー語がテュルク諸語起源であると主張するヴァームベリイと、フィン・ウゴル語族に属すると主張するブデンツ (József Budenz)、フンファルヴィ (Pál Hunfalvy) との間で論争が行われた。論点はハンガリー語に見られるトルコ語との共通語彙の位置づけを巡ってであったが、論争の結果、それらは言語接触による借用語であると結論された [Ablonczy2022: 23-25, 徳永・早稲田1992: 370]。
- 5 家田の記述をそのまま引用すると、「日本におけるツラン民族論は明治後期に既にその先がけをみることができると一例えば高山林次郎は「人種競争として見たる極東問題」(『太陽』明治31年1月20日)において、今日に於けるツラン人の対アリア闘争は日本人によって担われるべきであると論じている。また、ヴァームベリイは明治期にいち早く紹介されており、彼の学説と共にツラン民族論も輸入されたようである一組織的な形をとるようになるのは第一次世界大戦以降である。」[家田1982: 207] この、ヴァームベリイが紹介されたという文献を、筆者は遂に特定することができなかったが、ヴァームベリイはハンガリー人のアジア起源説を積極的に説いたのであって [Ablonczy2006: 28]、「トゥラン民族論」が彼の学説と共に輸入されたとは必ずしも言えないのではないだろうか。なお、『東欧を知る事典』の「ツラニズム」の項においては、家田は「日本へのツラニズムの紹介は明治

- 期に高山林次郎らによって行われた」と述べるに留めている〔家田 1993: 288〕。『東欧を知る事典』での家田の記述は、2001年の新訂増補版、2015年の新版においても変わっていない。高山の著作については第3節で詳しくみる。
- 6 ミュラーの人生については長田 [2002: 119-127]、Bosch [2002]、Chaudhury [1974]、Davis [2012]、Stone [2002] 等を参照。これらの先行研究からもわかるように、ミュラーは、ドイツからイギリスに移住し、多くの人とかかわりを持っている。加えてミュラーはインド文献学・思想史の専門家でもある。彼の研究・著述活動を根本から分析するには、当時のヨーロッパの国際情勢と学問の関係を十分に把握することに加えて、当時の東洋学やインド学等の知識も必要である。
  - 7 トウラン言説の起源を19世紀前半のフィンランドの東洋学者のカストレーン (Matthias Aleksander Castrén) に求める考え方も可能だが、この点は慎重に議論すべきだと筆者は考える。カストレーンは、後のウラル・アルタイ語族仮説の原型となる論を説いたのであって [Johanson 2006: 170, Karlsson 2006]、トウラン概念を論じたわけではないからだ。彼を「汎トウラン主義の父」とする言説は、後代の人々が遡及的に生み出したものである [Elmgren 2022: 318]。とはいえ、カストレーンの議論がトウラン言説、トウラン主義の発生を考える際に重要な位置にあることは事実であり、ミュラーにカストレーンの影響がなかったとも考えにくい。いずれにせよ、トウラン言説、トウラン主義の起源については、ヴァームベリイをその火付け役とする議論 (例えば Stoddard [1917]) も含めて、恣意性が入り込む余地があることには注意したい。
  - 8 本稿の執筆に際しては、1866年版を使用した。また本稿では、欧文の引用に際して、原文がイタリック体なのは引用においてもイタリック体とする。
  - 9 語種という訳語は、田中 [2021: 204] に倣った。
  - 10 ここでは文脈上、class を諸語と訳した。
  - 11 会議の様子については当時の *The Times* 紙 (1874年9月17日) がかなり詳しく報道している。また、会議での報告は2年後に論文集として出版されており、Douglas [1968] (リプリント版。初出は1876年) で見ることができる。
  - 12 *Information* は、エディンバラで出版社を起業したウィリアム兄弟が出版した啓蒙百科事典であり、1830年代から1870年代にかけて5つの版を重ねた。大槻が翻訳したのは第5版 (1874-75) である [長沼 2017: 59-102, 147, 152]。
  - 13 英語原文では *Types of Language* [Chambers & Chambers 1884: 28]。原文の参照に際しては、第5版の、1884年に再版されたものを使用した。
  - 14 Languages like the Chinese, whose development has been arrested at this rudimentary stage, are called *Monosyllabic* or *Isolating*. [Chambers & Chambers 1884: 28]
  - 15 The next stage of development is that of the *Agglutinate* languages, which are by far the most numerous, including the Turanian and American groups. In these, the relational part of thought obtains prominent vocal expression by separate roots, joined or *glued* on to the

significant roots as terminations. [Chambers & Chambers 1884: 28-29]

- 16 Yet no doubt is felt by philologists that the most highly organised of the inflecting or amalgamating languages began with the radical stage, and passed through the agglutinate. [Chambers & Chambers 1884: 29] 原文では「支那語の如き」に相当する文言がない。
- 17 シュライヒャーと言語発展論については田中 [2009: 46-56] を参照。
- 18 日本主義とは、日清戦争後に高まったナショナリズムの中で1897年5月に設立された大日本協会が中心となって喧伝した国家主義的な思想・運動である。特に高山の日本主義は、史料の比較考察によって客観的に「国民的特性」を明らかにする姿勢を取った [藤平 2005: 148, 154]。
- 19 『帝国百科全書』は1898～1910年にかけて博文館から全120冊刊行されたシリーズ叢書であり、文部省主導の『百科全書』刊行事業とは別のものである [長沼 2017: 286]。
- 20 『世界文明史』は、序論「文明史とは何ぞや」で始まり、第1編は「非文明的人類」、第2編は「東洋の文明」、第3編は「歐羅巴」である。
- 21 高山は『世界文明史』において、「政治史」と「文明史」を区別している。前者が「国家の政治や事件の順序や関係を記述し、外面上の現象を分析するものであって、事件の根底にある時代背景や個人の内面的探索をするものではない」のに対して、後者は「人類社会一般の發達を其の精神的方面より観察し、其の外部に表はれたる政治、経済、宗教、文藝、其他もろもろの文物に対して、其の成立變遷の説明を與ふる」ものであるとする。また、「苟も人類社会の進化に與かるものは、凡て人文進歩の過程を成すに於て缺如すべからざるの要素となす。宗教も、文學も、哲學美術も、政治経済も、觀するに人文を経緯するに必須の線條を以てす。政治史其物も亦是の如き人文發達の根本的説明に依傍する」、「人文史は政治史の所依なりと謂ふべきか」とも述べている [高山 1994a: 1-2]。
- 22 「人種競争として見たる極東問題」は、雑誌『太陽』の1898年1月20日号に掲載された。
- 23 「十九世紀總論」は、高山が準備していた『十九世紀文明史』という著書の導入部分にあたるのだが、結局本論部分は完成しなかったようである [姉崎 1994: 5]。
- 24 筆者は東京専門学校出版部から出された版（出版年不明）を国立国会図書館のデジタルコレクションから閲覧した。
- 25 最後の「チューレーニアン族は猶ほ嚴格なる家族の意味によりて、未だ一家族たらざるべければなり」の部分は、意味をわかりやすくするため、南條が自ら補ったものと思われる。
- 26 ただし、トルコでのトゥラン主義においては、汎イスラーム主義と汎テュルク主義と重なり合いながら、トゥランはテュルク系諸民族として解釈されて論じられた部分も大きい [レヴェント 2019: 86-92, Stoddard 1917: 19]。
- 27 なお、高山へのミュラーの影響については平藤喜久子の研究があり、注目に値す

る。高山の「古事記神代巻の神話及歴史」(1899年、『中央公論』14巻3号)は、「スサノオ論争」を引き起こし日本神話学の起点となった論文であるが、この論考にミュラーの比較神話学の影響が強く見られることを平藤は指摘している。実際、この高山の論文では日本人南方起源説を論じる箇所ですべて「トゥラン人種」の語が使われている〔藤平 2005: 143-144〕。

[参考文献] (アルファベット順)

Ablonzy, Balazs

2006 *Pal Teleki*. Cambridge University Press, Cambridge.

Ablonzy, Balazs

2022 *Go East!* Indiana University Press, Bloomington.

姉崎正治

1994 「序言」姉崎潮風ほか編『樗牛全集5』日本図書センター、東京、1-7。

Bosch, Lourens P. van den

2002 *Friedrich Max Müller*. Brill, Leiden.

Chambers, William & Chambers, Robert

1884 *Chambers's information for the people. Fifth Edition*. Vol. 2. Chambers, London.

Chaudhury, Nirad C

1974 *Scholar Extraordinary*. Chatto and Windus, London.

Davis, John R

2012 “Friedrich Max Müller the British Empire.” in John R. Davis et al. (eds.) *Transnational Networks*. Brill, Amsterdam, 79-99.

Douglas, K. Robert (ed)

1968 *Transactions of the Second Session of the International Congress of Orientalists, held in London in September, 1874*. Kraus Reprint, London.

Driem, George

2004 “Hodgson's Tibeto-Burman and Tibeto-Burman Today.” in David M. Waterhouse (ed.) *The Origins of Himalayan Studies*. Routledge, New York, 227-248.

Elmgren, Ainur

2022 “Imperial Complicity” in Josephine Hoegarts et al. (eds.) *Finnishness, Whiteness and Coloniality*. Helsinki, Helsinki University Press, 315-343.

服部四郎

1989 「アルタイ諸言語 The Altaic Languages」『服部四郎論文集3』三省堂、東京、172-181。

浜由樹子

2011 『トゥラン主義とその時代』津田塾大学国際関係研究所、東京。

平藤喜久子

- 2005 「日本における神話学の発生と高山樗牛」『國學院大學紀要』43, 141-156。  
家田修  
1982 「日本におけるツラニズム」日本東欧関係研究会『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』日本東欧関係研究会, 東京, 207-210。  
家田修  
1993 「ツラニズム」柴宜弘ほか監修『東欧を知る事典』平凡社, 東京, 288-289。  
家田修  
2002 「トゥラニズム」梅棹忠雄監修『世界民族問題事典新訂増補版』平凡社, 東京, 783。  
Johanson, Lars  
2006 "Altaic Languages." in Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of Language & Linguistics*. 2<sup>nd</sup> ed. Vol 1, Elsevier, Amsterdam, 170-172.  
姜克實  
2003 『浮田和民の思想史的研究』不二出版, 東京。  
Karlsson, Fred  
2006 "Mattihias Aleksander Castrén (1813-1852)" in Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of Language & Linguistics*. 2<sup>nd</sup> ed. Vol 1, Elsevier, Amsterdam, 234.  
レヴェント, シナン  
2019 『日本の“中央ユーラシア”政策』彩流社, 東京。  
マクス・ミューレル  
1907 (南条文雄訳)『比較宗教学』博文館, 東京。  
Müller, Friedrich Max  
1866 *Lectures on the Science of Language*. Longmans, Green, London.  
Müller, Friedrich Max  
1873 *Introduction of Science of Religion*. Longmans, Green, London.  
長沼美香子  
2017 『訳された近代』法政大学出版会, 東京。  
大槻文彦 (訳述)  
1883 『言語篇』有隣堂, 東京。  
長田俊樹  
2002 『新インド学』角川書店, 東京。  
長田俊樹  
2020 「日本言語学序説」長田俊樹編『日本語「起源」論の歴史と展望』三省堂, 東京, 315-334。  
長田俊樹  
2021 「「再考」再考」『国立国語研究所論集』21, 41-64。  
Poppe, Nicholas

- 1965 *Introduction to Altaic Linguistics*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Rachewiltz, Igor & Rybatzki, Volker
- 2010 *Introduction to Altaic Philology*. Brill, Leiden.
- Stoddard, T. Lothrop
- 1917 "Pan-Turanism." *American Political Science Review* 11-1, 12-23.
- Stone, Jon R
- 2002 "Introduction." in Jon R. Stone (ed.) *The Essential Max Müller*. Palgrave Mcmillan, New York, 1-23.
- 高山樗牛
- 1994a 「世界文明史」姉崎潮風ほか編『樗牛全集5』日本図書センター, 東京, 1-282。
- 高山樗牛
- 1994b 「人種競争として見たる極東問題」姉崎潮風ほか編『樗牛全集5』日本図書センター, 東京, 339-353。
- 高山樗牛
- 1994c 「十九世紀總論」姉崎潮風ほか編『樗牛全集5』日本図書センター, 東京, 285-336。
- 田中克彦
- 2009 『ことばとは何か』講談社, 東京。
- 田中克彦
- 2021 『ことばは国家を超える』筑摩書房, 東京。
- The Times*. (1874年9月17日号)
- 徳永康元・早稲田みか
- 1992 「ハンガリー語」『言語学大事典3』平凡社, 東京, 361-371。
- 浮田和民
- (出版年未詳) 『西洋上古史』東京専門学校, 東京。
- Викторова. Л. Л
- 1980 Монголы: Происхождение Народа и Истоки Культуры. Издательство «Наука», Москва.
- Whitney, William Dwight
- 1892 *Max Müller and the Science of Language: A Criticism*. D. Appleton and company, New York.
- 吉澤誠一郎
- 2010 「中国における近代史学の形成」『歴史学研究』863, 2-11。
- 吉田精一
- 1977 「高山樗牛」日本近代文学館編『日本近代文学大事典2』講談社, 東京, 299-301。

## **Turanian Discourses before Turanism Movements:**

### **The theory of Friedrich Max-Müller and Japan in Meiji Period**

Kenta NAKAI

Turanism (Pan-Turanism, Pan-Turanianism) was an ideology which sought the union of “Turanian” nations. It is often understood and written that “Turan” is the same concept as “Ural-Altai” language family. Turanism itself was the phenomenon of political movement in 20th century, but the word and the concept of “Turan” (and “Turanian”) was created in 19th century. In 19th century and still in 20th, the word “Turan” had not been defined clearly. People used this word in variety of meanings in variety of way of using. Understanding that the concept of Turan has been used as the synonym to Ural-Altai language family, and that Turanian people are the the people of Ural-Altai languages is not correct.

Friedrich Max-Müller, who is seen as one of the inventor of the concept of “Turanian”, defined “Turanian” as a language group which consists not only of “Ural-Altai Languages,” but also of Chinese and Southeast Asian Languages, and called them “nomadic languages.” As early as in that era, not a few scientists were already skeptical about the linguistic affinities between “Turanian” languages. In late 19th century, the word “Turan” was imported to Japan and they began to use, but the meaning and the way of using was un unstable. For example, Takayama Rinjiro (Chogyu), a critical writer, in his writings in 1898 and 1900, defined “Turan” as one of the biggest human races in the world, and described World History as the battle between Turanian and Aryans. Ukita Kazutami, a Christian philosopher, wrote that “Turanian race” did the first and the most difficult work in the history of human

civilization, and criticized European historians of regarding “Aryan race” as the only civilized race. We can see a deviation of their definitions of the word Turan from that of Max-Müller. They both placed “Turadians” in a very important position in the context of battle of Asians and Europeans in the World History. In other words, they wrote “Turadians” as representatives of Asian civilization, although in this time not a few scientists are doubtful.

In the same period, also by translated books, the word “Turan” was introduced to Japan. In Ootsuki Humihiko’s *Gengohen* (1883), which is the translation of the “Language” section of Chambers’s information for the people, “Turan” was written as a language group, and it introduced the trends of controversy about the concept of “Turan” in western academism. On the other hand, in Nanjou Bun-yuu’s *Hikaku-shuukyougaku* (1907), which is the translation of Max-Müller’s *Introduction of Science of Religion* (1873), “Turan” was written in the way of Max-Müller’s style. In this book, Max-Müller applied the method of comparative linguistics to religious studies, so “Turan” is also introduced in the context of religious studies.

By rethinking “Turadian” discourse in 19th century, we can have a more deep insight to the Turadian movements in 20th century. The Turadian movements showed different aspects and developments depending on places — Japan, Turkey, and Hungary. Observing the process of accepting of the word Turan in every place leads to understanding the uniqueness of Turanism movements in every place.

